東京外国語大学　ICS 8—2004　総合文化研究所

2004 年度所員活動報告

機関誌『総合文化研究』８号付録

青山亨

【論文】

1.「インドネシアにおけるリベラル派イスラームの新思潮：ウリル・アブシャル・アブダラのコンパス紙論説をめぐって」『東京外大東南アジア学』第 9 巻 , 2004 年 3 月 31 日 , pp. 24-41.

2.「ギアツの『ジャワの宗教』とイスラームへの視点」『総合文化研究ブックレット』第 4 号 , 2004 年 10 月 , pp. 10-16.

【研究発表・シンポジウム】

1.「ヒンドゥー・ジャワ時代の仏教とヒンドゥー教：差異化と同一化」. 東南アジア史学会関東部会 9 月例会報告 .　2004 年 9 月 25 日 , 東京大学 .

2. "Texts in a Codex and Its Significance." 8th International Symposium on the Manuscripts of Nusantara VIII. 報告 . 2004 年 7 月 26-28 日 , インドネシア国立イスラーム大学（ジャカルタ）.

3.「南海の女王ラトゥ・キドゥルをめぐって」. シンポジウム「文化表象としての〈イスラーム〉」報告 . 2004 年 12 月 3 日 , 東京外国語大学 .

荒このみ

著書

『アフリカン・アメリカン文学論――「ニグロのイディオム」と想像力』（東京大学出版会）. 265 頁 . (2004・7・15).

論文

1.「『儀式』における Cultural Hybridization（文化的融合作用）」1 - 15. 世界文学 . No.98. 世界文学会 . 119 頁 .
2.「レ・ミランド城のジョセフィーン・ベイカー ――「虹の部族」と「世界のキャピタル」」4 - 26. 総合文化研究 Vol. 7. 東京外国語大学総合文化研究所 . 258 頁 .
3.「アメリカにおけるイスラーム・プレゼンス」総合文化研究所ブックレット No.4. 東京外国語大学総合文化研究所 . 1-9 頁 .

書評

フランケチエンヌ他著立花・星埜訳『月光浴』（国書刊行会）. 図書新聞 (2004・1・17).

デービッド・カラハン著小林訳『「うそつき病」がはびこるアメリカ』（NHK 出版）. 神戸新聞・河北新報等 . 共同通信配信 . (2004・10・17).

Mary YukariWaters. The Law of Evening. (Scribner). アイ・フィールi feel.No.30 . （紀伊国屋書店）. (2004・11・1).

ラルフ・エリスン著松本昇訳『見えない人間』I.II（南雲堂フェニックス）. 図書新聞 (2004・12・11).

シンポジウム

テーマ : 文化表象としての〈イスラーム〉（東京外国語大学総合文化研究所主催）.「アレックス・ヘイリー著『ルーツ』に見られるイスラーム・プレゼンス」について報告 . (2004・12・3)

講演会

「『見えない人間』におけるアメリカ的精神」について講演 . 明治学院大学 (2004・12・14).

藤井守男

西暦 12 世紀初頭のペルシア語テクスト Kashf al-asrar wa ‘uddat al-abrar（Rashid al-din Maybudi—イラン原音では Meybodi—著）に関するイラン国内の研究動向を調査するためイラン（9 月）に滞在した。これは、平成 16 年度から開始された科研「古典期ペルシア語神秘主義テクストのデータベース化による文体論的研究」の一端として行われたもので、このテクストに関するイラン国内の研究の方向性の一部を具に知る機会を得た。イランでは、このテクストの再校訂も検討されているが、ペルシア語タフスィール（『クルアーン』注釈書）Kashf al-asrar の、特に神秘主義的傾向が顕著に現れた第三部に関して、その土台となるテクスト（タフスィールが多い）との比較研究がすでに進められており、本テクストの文献学的研究の実際に触れたという点で成果があった。

岩崎務

【研究調査】

・科学研究費補助金基盤研究 (C)(2)「家郷喪失者」の観点による古代ローマ詩比較研究（研

究代表者）
・科学研究費補助金基盤研究 (B)(2) 中世西欧文学の「間テクスト性」に関する文献学的・言語学的研究（研究分担者）
・科学研究費補助金基盤研究 (A) ポスト・グローバル化時代の欧米ユーラシア文化にみる規範と越境に関する総合的研究（研究分担者）

【著書】
『CD エクスプレス ラテン語』、白水社、2004 年 11 月。

【講演】
・「ローマの恋愛詩」、第 1 回蓬蘆書屋セミナー、2004 年 8 月。
・「ギリシア語と日本語――テンスとアスペクトを中心に――」、東京外国語大学公開講座『日本語から見た世界の言語――対照研究への招待――(5)』、2004 年 11 月。

加藤雄二

主な活動

① The 7th International F. Scott Fitzgerald Conference（6 月末～7 月 2 日、スイス Vevey）で “Tender Is the Nightmare: Haruki Murakami’s Appropriation of F. Scott Fitzgerald’s Works and the Contexual Importance of His Works in Japan” と題した発表を行う。同一セッションで発表をされたフランス、スコットランドからの参加者に圧倒される。発表をもとにした論文を構想中。

② アメリカ Melville Society に提出していた 50 ページ少しの長さになった論文を出版の都合で短くするようにとの連絡を受け、その作業をして 10 月に原稿を再提出。

③ 12 月 Philadelphia で開かれたアメリカ Modern Language Association の全国大会に聴衆として参加。①の発表の際の反省（プレゼンテーションの方法や現在のアメリカの学会の状況に必ずしも親しんでいない）があり、今後の仕事の参考にするために参加が必要と判断した。William Faulkner や Edgar Allan Poe の研究者たちと意見交換。

④ 以前から Henry James に関する研究論文執筆や学会発表を行いたいと思っていたが、今年 7 月 Venice で開かれる Henry James 学会について知らずにおり、発表概要を提出できず。5 月に Boston で開かれる American Literature Association の全国区大会に向けて、Edgar Allan Poe と William Faulkner にかんする発表のための proposal を執筆のうえ

提出。

川口健一

【論文】

「芸術の行方 —ベトナムにおける 1930 年代半ばの文学論争—」『東京外大 東南アジア学』(第 9 巻)、東京外国語大学外国語学部東南アジア課程研究室、pp.42-50、2004 年 3 月 31 日発行

【研究ノート】

「ハイ・チエウの文芸批評」『東京外国語大学論集』（第 68 号）、pp.153-162、2004 年 7 月 30 日発行

【エッセイ】

「ベトナムの現状」『言葉の牢獄 —方言からの再出発—』（社団法人日本ペンクラブ、第 24 回 WiP（ライターズ・イン・プリズン）の日パンフレット、pp.20-21、2004 年 10 月 24 日開催）

【書評】

『カンボジア 花のゆくえ』（パル・ヴァンナリーレアク著、岡田知子訳、段々社、2003 年 10 月 20 日第 1 刷）『総合文化研究』（第 7 号）東京外国語大学総合文化研究所、pp.202-204、2004 年 3 月 18 日発行

【セミナー】

独立行政法人国際交流基金のプログラムでベトナムから招聘した研究者を報告者に、以下のセミナーを開催した。

「上田秋成『雨月物語』とグエン・ズー『伝奇漫録』をめぐって」（4 月 27 日）

場所 : 東京外国語大学本郷サテライト

【学外活動】

大阪地方裁判所 法廷通訳フォローアップセミナー講師

2004 年 9 月 30 日～ 10 月 1 日

横浜地方裁判所 法廷通訳セミナー講師

2005 年 2 月 3 日～ 4 日

菊池陽子

〈論文〉

「1940 年代初期のラオスに対するタイの宣伝活動とフランスの対応」根本敬 編 AA 研

東南アジア研究 第6巻『東南アジアにとって20世紀とはなにか—ナショナリズムをめぐる思想状況—』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 2004年3月12日 23頁~38頁

〈公開講座〉

「ラオス」の形成(イントロダクション)2004年1月19日 国際交流基金アジアセンター 2003年度第3期アジア理解講座「ラオスを知ろう」

「ラオスってどんな国?」2004年5月22日 吉祥寺東コミュニティ協議会主催アジアを知ろうVIII「ラオス」第一回

〈東南アジア通信〉

「カンボジアのラーオ人」『東京外大 東南アジア学』第9巻 2004年3月31日 東京外国語大学外国語学部東南アジア課程研究室 156頁~157頁

栗田博之

・論文:パプアニューギニア—モザイク状の民族分布

青柳真智子編『国勢調査の文化人類学』に収められた。国家による「民族」の認知過程を明らかにする事を目標として行われた科研による研究の報告書である。

・翻訳:なし

日本民族学会の研究大会が、本学(AA研)が当番校となって、2004年6月に開催され、無事終了した。但し、大学の施設使用料が大きな問題となっており、まだ決着していない。今後本学で学会の研究大会等が開催可能かどうかがかかっているのだが、なかなか話が進まないようである。

水野善文

〈論文〉

平成16年1月18日「アジャーミラ物語 —『バーガヴァタ・プラーナ』第6巻に見る称名—」『宮澤正順博士古稀記念・東洋—比較文化論集—』(青史出版、pp.495-506.)

(概要)10世紀頃南インドで成立したとされる『バーガヴァタ・プラーナ』の第6章所収のアジャーミラ物語について、サンスクリット原典からの翻訳を付して紹介した。あ

る不道徳な男が年老いて臨終に望み、最愛の息子、ナーラーヤナの名を叫んだことによって、天界からナーラーヤナ（＝ヴィシュヌ）神の使者が訪れ、死神ヤマ（閻魔）の使者との論議の末、その男を救いとるという趣旨の物語である。たとえ信仰心を欠いた人間でも、しかも、そう意識したわけでもないのに、神（と同一）の名を唱えたことによって救われるという、称名の究極的功徳を述べている点、我が国の浄土教との関連からも注目すべきであることを指摘した。

〈訳書 (共訳)〉

平成 16 年 7 月 15 日 日野紹運・金沢篤・水野善文・石上和敬訳『バシャムのインド百科』（山喜房佛書林、517p.）

(概要) インドの古代から中世前半までの文化万般を扱った古典的名著 A.L.Basham, The Wonder that was India, 3rd ed. (1975, London) のうち第 9 章「言語と文学」(Chapter IX:Language and Literature, pp.388-480.) の翻訳を担当した。

〈事典項目〉

平成 16 年 2 月 15 日 岸本美緒責任編集『歴史学事典、第 11 巻 宗教と学問』（弘文堂、818p.）

（概要）「カルマ」「サンサーラ」「ニルヴァーナ」「仏教」「仏教僧伽」の項目の執筆を担当した。

村尾誠一

2004 年は、前年末から引き続いた、師である久保田淳先生の著作選の解説を書くことから始まりました。三人で分担し割り当ては原稿用紙十枚の原稿ですが、3 月の半ばまでかかりました。その間対象となる論文のみではなく、師の仕事に釘付けの状態となり、多くのことを今さらながら学びました。作品をしっかりと読み解くという文学研究の王道を基本としながらも、文学史全体に及ぶとてつもない深い見通しがしっかりと背後に息づいていることに改めて感銘し、今後の仕事の糧となりました。『久保田淳著作選』（岩波書店・担当は第三巻「中世の文化」）全三巻として 6 月に完成し、古稀のお祝いの会で献呈することができました。

その後、5 月に前年の口頭発表をもとに「『後鳥羽院御口伝』の執筆時期再考」という論文を書き上げ、新古今直後の和歌という問題に手応えを感じました（『和歌文学研究』89 号・12 月）。夏休みは意気込みは大きかったのですが「新古今の中の万葉」という論文だけが完成しました（『国文学』11 月号）。南都復興とからめて思わぬ展開で人麿歌について論じられたのは収穫でした。並行して進めていた「隠岐の後鳥羽院」と題した遠

島百首という作品を中核に隠岐に配流された後の後鳥羽院の和歌世界を論じた論文は、学部時代の恩師の追悼論文集（来年刊行予定）のためのものですが完成は年を越えてしまいました。割り込むような形ながら年末に、最も敬愛している近代の歌人である会津八一について、明治書院の和歌文学大系の月報の原稿として小文を書けたのも楽しい仕事でした（来年刊行予定）。奈良の地に関わる論は、昨年から関わっている高等学校国語教科書の編纂の仕事の拠点が京都であるのが幸いし、会議出席の合間に奈良への小旅行を企て、改めてその風光に触れながら発想できたのも、何とも嬉しいことでした。15 世紀の歌人正徹の伝記を書き上げる仕事も抱えながら今年は仕込みで終わりました。来年は執筆に励む予定です。去年項目を書いた佐々木幸綱・復本一郎編『三省堂名歌名句辞典』（9 月）は結構便利な本に仕上がり時々自分でも引いています。

岡田和行

【論 説】

「D・ナツァグドルジの 1932 年の投獄をめぐって」『事業之路 同仁之情――蒙古学学者蓮見治雄教授退官紀念文集』（烏・那仁巴圖、二木博史、拉・呼日樂巴特爾編）、内蒙古文化出版社、2004 年 1 月、pp.226-241.

Mongol romand durslegdsen Yaponii olzlogdogsod, MONGOLICA, International Association for Mongol Studies, Ulaanbaatar, Vol.15(36), 2004, pp.110-125.

【記 事】

「モンゴルから見た万里の長城」『東洋学研連ニューズ』、第三号、2004 年 4 月 10 日、18 頁。

岡田 知子

〈資料紹介、エッセーなど〉

・「『カンボジア 花のゆくえ』ある女流作家の人生にみるカンボジア」『クロスロード』2004 年 2 月号、pp60-62。

・「世界の文学 カンボジア」東京新聞 (夕刊)、2004 年 4 月 2 日

・「クメール・ルージュの革命詩歌」（松本由麻との共著）、『東京外大東南アジア学』第 9 巻、2004 年、pp127-133。

・「現代史に翻弄された本たち」『附属図書館報 Castalia』第 8 号（インターネット版）2004 年 9 月

〈その他の活動〉

・慶應義塾大学言語文化研究所「東南アジア諸言語研究」カンボジア語担当

・特定非営利活動法人幼い難民を考える会アドバイザー
・特定非営利活動法人幼い難民を考える会 チャリティ語学講座「はじめてのカンボジア語」「文字から学ぶカンボジア」(2004 年 5 月 14 日 -7 月 16 日、全 10 回担当、会場 : 本郷サテライトキャンパス)
・花王株式会社「チャリティ・カンボジア語講座—カンボジア語を学んで国際協力—」(2004 年 11 月 5 日、11 月 12 日担当、会場 : 花王株式会社)
・東京外国語大学貴重書展示会「出版文化を通して見るカンボジア現代史」(会場 : 東京外国語大学附属図書館、2004 年 10 月 25 日～ 11 月 22 日)
・カンボジア王国 2004 年ヌー・ハーイ文学賞短編小説審査委員

佐々木あや乃

〈論文〉
・「ハーフェズ詩注解 (1)」『東京外国語大学論集』第 68 号 pp.99-128. 2004 年 7 月 30 日
・「「弊衣」とハーフェズ～その社会批判の精神を探究する～」
『総合文化研究』7 号 pp.156-175. 2004 年 3 月 18 日

〈学会発表〉
・"Social Custms in Poems of Hafiz" (in Persian), The second National Congress on Iranian Studies, December 20-23, (December 21 Session 5, 17:35-17;55), Hafezieh Complex (Tehran)

〈教材 (専攻語内資料)〉
・『ペルシア古典文学入門』99p. 2004 年 7 月 30 日
・『ペルシア語基礎講座』2 巻（執筆担当）106p.+116p.
東京外国語大学ペルシア語研究室 2004 年 4 月 1 日

〈その他〉
・2004 年度『ペルシア語入門』全 10 回のうち 2004 年 11 月 9 日、11 日、16 日担当
（於東京外国語大学府中キャンパス）
・2004 年度国際交流基金主催『中東理解講座』「ペルシア文学」全 3 回のうち
「ハーフェズと現代イラン（ペルシア古典文学)」2004 年 11 月 5 日担当
・第 20 回〈東京の夏〉音楽祭 2004〈イラン古典音楽の現在〉ホセイン・アリーザーデコンサートに際し、ミールザー・ナスィール・エスファハーニー、アブー・サイード・アブルヘイル、モウラヴィーの作品（歌詞）計六編の翻訳。

鈴木聡

論文

「円と悪夢 —— ヴラジーミル・ナボコフの『ベンド・シニスター』(『東京外国語大学論集』第六八号、六五–八六ページ)。

「反復と循環 —— モダニズムにおけるジョイス的方法の位置づけについて」(『英語青年』第一五〇巻第七号、四一三–一五ページ)。

「亡霊と色彩 —— ヴラジーミル・ナボコフの『セバスチャン・ナイトの真実の生涯』(『東京外国語大学論集』第六九号、六一–八三ページ)。

翻訳

ガヤトリ・スピヴァック著『ある学問の死』(みすず書房)。

エッセイ

「ヴラジーミル・ナボコフとドイツ文学」(『TRANS ——「『翻訳』の諸相」研究会ニューズレター』第一一号、八–九ページ)。

書評

テリー・イーグルトン著『甘美なる暴力』(『週刊読書人』第二五七三号、三ページ)。

シンポジウム

「ヴラジーミル・ナボコフの『ロリータ —— 脚本』とスタンリー・キューブリック監督作品『ロリータ』」(日本ナボコフ協会二〇〇四年六月大会シンポジウム「スクリーン上のナボコフ —— 映画と小説の間」、二〇〇四年六月五日)。

講演

「仮面の美学、幻影の想像力 —— アイルランド文学によって映し出された日本」(国際理解教育セミナー、二〇〇四年六月二十六日)。

公開講座

「モダニズムと辺境性 —— ジョイスからナボコフへ」(二〇〇四 EUIJ 公開講座 —— ヨーロッパというかたち」、二〇〇四年十一月二十六日)。

柴田勝二

2001 年に三島由紀夫に関する研究をまとめ、著書として刊行するとともに、博士論文として学位を授かりましたが、それ以降小説における〈作者〉の存在を考えるというテーマで、漱石、谷崎、大江らを対象として論考を書き継いできました。04 年 7 月にこれらを新曜社よりまとめて上梓することができ、これが 04 年の研究活動の中心的な成果となりました。現在はこの本でも取り上げた漱石をあらためて捉え直す作業を進めています。近年は漱石に民主的、反権力的な文学者の像を付与する傾向が顕著ですが、これは多分

に〈戦後民主主義〉のイメージを遡及的に当てはめた側面が強く、明治の文学者にとって妥当であるかどうか疑問に思っています。漱石は確かに権力に迎合しない人でしたが、一面では明らかに愛国者であり、そこから国家のあり方を批判せざるをえない文学者でした。こうした、〈国家に批判的な国家主義者〉の表現として漱石の世界を位置づけることを試みています。また9月に北京外国語大学内の日本文化研究センターで漱石と東アジアの関係について講演をおこない、後の質疑や懇親会で中国の研究者、院生と交わりを持つことができたのは楽しい経験でした。

04年の研究活動の成果は以下の通りです。

《著書》
・『〈作者〉をめぐる冒険』(新曜社、2004・7、342頁)
《論文》
・「語り直す機構――〈機能としての作者〉と『舞姫』」(『敍説』(監)―07、2004・1、60～81頁)
・「〈越境〉する漱石・近代日本――『坊つちやん』をめぐって」(『総合文化研究』7、2004・3・3、85～100頁)
・「〈戦う者〉の系譜――『坊つちやん』における〈戦争〉」(『敍説』(監)―08、2004・8、138～153頁)
・「谷崎潤一郎とオリエンタリズム」(『日本近代文学』第70集、2004・5、117～125頁)
《書評》
・「岡本章編『煉肉工房 ハムレット・マシーン【全記録】』」(『総合文化研究』7、2004・3、197～199頁)
《講演》
・「夏目漱石と東アジア」(於・北京日本文化研究センター、2004・9・24)

武田千香

6月に、文部科学省による「平成17年度現代的教育ニーズ取組支援プログラム」に、本学が「在日外国人児童生徒への学習支援」を申請することが決まって、急遽その申請準備に急遽とりかかり、9月に採択が決まってからというもの、文字通りこの取組に忙殺されました。この取組をきっかけとして、学内に「多文化コミュニティ教育支援室」を設置、室の態勢を整備しつつ、同時に活動を開始。2004年の後半のまるまる半年をこの取組に費やしてしまいました。同取組の期間は平成18年度までですので、あと2年はこの状態が続くことになります。

この状況の中で、なんとか自分の研究の時間を確保していくのが当面の私の課題です。

2004 年の発表原稿は次のとおりです。

〔論文〕

「エゼキエルの預言――寓意小説としての『ドン・カズムーロ』の重層性」(『総合文化研究 vo. 7』)

「南米大陸に果てたナポレオン的「妄想」――マシャード・デ・アシスとパラグアイ戦争――」(『東京外国語大学論集 69 号』)

〔エッセイ〕

「それぞれのカーニバル」(大修館、『英語教育』2004, vol.52, No.12)

谷川 道子

昨年も何だか忙しかったのに実際には何をしたのだろうと、ともあれ振り返って考えさせて貰える機会がこの活動報告なのだと実感しています。そういう意味では自分のための回顧的な活動営為再確認のようなものですが・・・。

まずは演劇実践現場との関わりから。

2003 年秋から冬にかけて東京でほぼ同時並行的に開催されたドイツ演劇絡みでの二つの演劇祭の延長戦―その一つの文化庁国際芸術振興基金の助成も受けた「ハイナー・ミュラー・ザ・ワールド HM/W」は、2004 年の一年をかけて各月に参加団体と会議を重ね、その総括の記録集を一年後に出す予定だったが、結局これは間に合わずに 2005 年に持ち越しとなった。ハイナー・ミュラー没後 10 年にもあたる今年に、HMP 活動 15 年史もかねて刊行の予定。ただ 8 月には金沢市芸術村で関連する演劇祭「HM サミット」が開催、ハイナー・ミュラーのテクストによる三本の舞台が上演され、あわせてのシンポジウムにも参加。HMP の点と線を紡ぐ活動は今なお続いている。

もう一つは両国シアター X での「2 年がかりのブレヒト的ブレヒト演劇祭」で、これも昨年がその二年目。9 月に井田邦明演出でブレヒト作『ウイ』が上演され、その上演パンフに「二年がかりのウイ探しはどこに着地するのか」を寄稿したり、また、11 月にはシアター X 演劇シンポ「ブレヒト vs ベケット」を企画してパネリストとしても参加、等々。

同じ 11 月には、千田是也アーカイブが早稲田大学演劇博物館に設立されたのを記念して早稲田大学国際会議場で開催された、オール早稲田文化週間参加企画および 21 世紀 COE 演劇研究センター共催によるシンポジウム「千田是也―いま振り返る“新劇の巨人”」に協力してパネリストとしても参加。その記録集の刊行は 2005 年度に持ち越し。その早稲田大学演劇博物館 21 世紀 COE プログラム「演劇の総合的研究と演劇学の確立」にもいろいろ協力しているが、その一環として開催された演劇論講座の 5 名の論を集約した

『演劇の知、知の劇場』が、これも今年の年３月にペリカン社から刊行予定。
また昨年３月には、徳島近代美術館で開催されたドイツ発信の「シーニック・アイ―美術と劇場」展も訪問して、そのセミナーに参加した。

2005 年は「日本におけるドイツ年」で、日本独文学会の企画担当理事としてもだが、演劇関連でも、もろもろの企画や行事が予定されている。その一環として、ドイツ文化センターの後援で、ドイツ戯曲を 30 作品翻訳するプロジェクトが進行中。若い気鋭のゲルマニストを中心に分担（若く気鋭ではない私もイエリネクなどを担当)、その半数の翻訳作業はほぼ完了しているので、2005 年春から論創社より順次刊行の予定。あわせて、関連のシンポジウムやビデオ・トーク、ドラマ・リーディングなども並行して波状的にシアター X や世田谷パブリック・シアターなど随所で企画されている。それらの企画集団「ドイツ演劇プロジェクト 2005」も立ち上げた。HP を参照されたい。また現代ドイツ演劇紹介のために拙著『現代ドイツ演劇の構図』も今年の春には刊行予定。

本学関連の活動も、紹介をかねていくつか触れさせていただきたい。
本総合文化講座の麻田豊先生をチーフとする「生きた言語習得ための 26 言語･語劇支援」がこの 10 月からの文部科学省の「特色ある大学教育支援プログラム」に採択され、まずはスペイン語劇 OB の佐野勝也氏の講演会をオープニング・セレモニーとしてスタート。また同じく 10 月に採択された武田千香先生をチーフとする「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」とともに、その活動の一環として 12 月 19 日には、ブラジル人が多く暮らす静岡県大東町で「日本･ブラジルの集い」を大東町と共催。ポルトガル語の劇『桃太郎』やブラジル文化との交流で 300 人近い参加者を得て（3 分の 1 はブラジル人！)、朝日・静岡・中日新聞にも記事が掲載された。本学の教育の特色を活かしつつの学生による社会貢献活動であり、また個人的には演劇（語劇！）でこういう活動も可能なのかと実感。
さらに三年越しの調布市市民カレッジ・シリーズ企画「地球ナヴィゲーション」も進行中で、第四回は「南北アメリカでの出会いと新世界の形成―都市的世界と多文化主義―」を昨秋、鈴木茂・金井光太朗・柳原孝教先生など六人の先生方で好評理に開催。2005 年夏には青山亨先生を中心に、「世界史の中の東西交流―イスラム圏の都市をめぐる」を企画して頂いていて、本総合文化講座の先生方のご協力に心より感謝！今秋の第六回はアジアを中心に開催の予定なので、またお願いにあがりますが、これもよろしくお願いします！

という次第で、結実は今年度送りという企画も多く、2004 年は個人的な刊行物として形になったものはあまり多くないのですが、既述以外のものをいくつか以下に記します。

＊「『三文オペラをめぐる』五つの位相」: 劇団黒テント『三文オペラ』上演パンフ､7~14 頁所収。
＊「ドイツ文化発信のネットワークを！―雑誌「Deli」紹介に寄せて」: ゲルマニア会編集

発行「ゲルマニア」第 6 号、26~30 頁に寄稿（これは本学ドイツ語専攻同窓会の機関誌で編集委員も担当、年二回発行されています）。

＊翻訳 : ミヒャエル・ヘルター「芸術と社会―芸術家会館ベタニエンの企て」:「舞台芸術」第五号（京都造形芸術大学 舞台芸術研究センター編集・発行）、86~96 頁所収（著者のヘルターさん夫妻を今秋にドイツから招聘予定）。

＊ “Der Apfel Brechts und seiner Frauen :Reise auf der Suche ihrer Spuren im Exil— Gerda Tombrock gewidmet”:In “Bertolt Brecht und Hans Tombrock—Eine Kuenstlerfreundschaft im skandinavischen Exil”,S.17~25, hrsg.von Rainer Noltenius、Klartext Verlag,Essen 2004.（これはドイツはベルリンからドルトムント、ノットベックなどへ巡演して開催された「ブレヒトとトムブロック」展への大部なカタログへのドイツ語での寄稿。ブレヒトの亡命地を追った 20 年前の旅で、ブレヒトの友人で放浪の画家だったトムブロックの未亡人ゲルダのストックホルムの家にお世話になったときの思い出に関連して、ブレヒトとトムブロックをめぐる女性たちについてドイツ語で書いた寄稿）。

＊「〈演劇〉の揚棄？―ブレヒトからミュラーを越えて」。岩波講座『文学 5』187~208 頁所収、岩波書店、2004 年 2 月（二年前に書いた原稿がやっと本になりました）。

＊「挑発続ける〈闘う〉女性作家―エルフリーデ・イエリネクのノーベル文学賞受賞に寄せて」、朝日新聞 10 月 8 日夕刊掲載。

書評 : 山口裕之著『ベンヤミンのアレゴリー的思考』、「総合文化研究」第 7 号、194 ～ 196 頁所収、東京外国語大学総合文化研究所発行、2004 年 3 月

土佐桂子

【論文・報告書】

「緬方医学史をめぐるメタナラティブ研究」『東南アジア史のメタナラティブをめぐる総合的研究 —— 国民国家の物語・ジェンダー・近代』（平成 13 年度～ 15 年度科学研究費補助金・基盤研究 (B)(1): 研究代表者小泉順子）（科学研究費報告書、2004 年 6 月発行）

【事典等】

小松和彦等編 2004 年『文化人類学文献事典』弘文堂（スパイロ『Kinship and Marriage in Burma』、土佐桂子『ビルマのウェイザー信仰』の項担当）

【発表】

原稿発表「菜食がもたらす社会空間」東京外国語大学 AA 研共同研究会「宗教と社会空間」（2004 年 11 月 13 日）

宇戸清治

【論文】

「現代タイ小説に見る表現技法 (1) チャート・コープチッティの実験的作品『時』の分析」（『東京外大東南アジア学』第 9 巻、東京外国語大学東南アジア課程研究室、2004 年 3 月、pp.95~105）

【監修】

『世界の文字と言葉入門 5: タイの文字と言葉』（小峰書店、2004 年 4 月、47 頁）

『デイリー日タイ英・タイ日英辞典』（三省堂、2004 年 6 月、1032 頁）

【翻訳】

ウィン・リョウワーリン「僧子虎鶏虫のゲーム」（『言語文化』第 21 号、明治学院大学言語文化研究所、2004 年 3 月）

プラープダー・ユン「バーラミー」（『新潮』2005 年 1 月号、pp.24~39）

【研究調査】

科学研究費補助金基礎研究 (C)(2)「1980 年代のタイ映画に表象された大衆文化の変容の研究」（研究代表者）

【書評】

赤木攻監修『間違いだらけのタイ語』（『DACO』158 号、2004 年 12 月）

山口裕之

【論文】

Die deutsche Kulturwissenschaftsdebatte im Spiegel. Neue Beiträge zur Germanistik [Hrsg. v. der Japanischen Gesellschaft für Germanistik] Band 3 / Heft 3, 2004, pp. 27-38.

【フォーラム】

「日本独文学会 ドイツ文化ゼミナール」実行委員、2004 年 3 月 14 日 - 20 日、長野県茅野市 アートランドホテル蓼科

「DAAD 友の会日独フォーラム」実行委員、2004 年 3 月 26 - 28 日、東海大学山中湖セミナーハウス

【その他】

（研究関連）

「「情報」のイメージ――新たでない情報概念のために」藤原書店『環』Vol.20 (2005),

pp. 119-127.

（エッセイ）

「ベートーヴェン 交響曲第５番ハ短調」（プログラムノート：新交響楽団第185回演奏会、2004年４月17日）

柳原孝敦

2004年度は口頭発表を３つほど行っただけで、活字化された仕事はない。何しろ新任で、環境の変化に適応するのに忙しかったのだと言っておこう。行った口頭発表は以下の三題。

「論争から主張へ —— 1940年代のメキシコ」は日本ラテンアメリカ学会第25回大会（於同志社大学）でのパネル「文学表象とラテンアメリカ社会」での発表。

「飛び交う青い猿 —— スペイン内戦とプロパガンダ」は世界文学界例会での発表。

“Sueños de una generación”（「世代の夢」）というスペイン語による発表を11月20日には行った。

これはベネズエラのロス・アンデス大学からグレゴリー・サンブラーノ氏を招いて開かれたシンポジウム Narrativa venezolana del siglo XX（20世紀ベネズエラのナラティヴ）で、パネリストの一人として行ったもの。このときの原稿は、近々、ベネズエラで活字化される予定。ただし、2005年１月31日現在、書き終えていない。果たして待っていてくれるのだろうか？

さて、活字化された仕事の量が少なかったのは、環境の変化によるものばかりとも限らない。研究対象が少し広がったことも原因。それを示すのが二つ目の発表。これまでアメリカ諸国からヨーロッパに渡った経験を持つ知識人たちを主に扱ってきたのだが、逆のルートにも目を向けてみようというのが、最近の私の興味関心。そちらへ対象をシフトする前段階として、内戦時のスペインの知識人たちの活動に目を向けてみたという次第。